



ここへ来たことは 私の人生の集大成

岸 幸一

(上小阿仁村地域おこし協力隊)

1 私の人生を変えた、東日本大震災

私は東京の都心、台東区という所で生まれ育ちました。浅草や上野があるのが台東区ですと言えば、少しはイメージできるかと思います。私は、姉が二人の『末っ子長男』で、他に男の兄弟が生まれなかったため「隅田川の橋の下で拾ってきた」と言われ、幼少期を過ごしました。小さい頃は姉たちにくっついてまわって、たくさん影響を受けていたからか、「スカートを穿きたい」と泣いて親にせがんでいたのですが、当の本人には、まったく記憶がありません。

中学校の入学式前日、父親に「野球部に入るので、バットとグローブを買って」とお願いしました。しかし、入学式を終え、たまたまバレー部の顧問だった担任の先生の、「おまえ、大きいからバレー部入れ」の一言は、私に検討の余地を一切与えてはくれませんでした。その日の夜、私は再び父と話をしました。その内容は、「やっぱりバットとグローブは要らないから、代わりにバレーシューズを買って」でした。その担任は小柄な女性の先生で、「花の咲かない寒い日は、下へ下へと根を伸ばせ」という、その後の私を支えてくれることになる言葉を教えてくださいました。鬼のようなスパルタ指導ではありましたが、たくさんの大切なことを教わり、まさに『恩師』と言えるほど、大切な存在となったのです。

中学・高校とバレーボールに励みましたが、

高校は商業高校だったため、珠算や簿記などの検定試験にも明け暮れ、当然のように事務系の仕事に就くものと思っていました。しかし、バブル後の不況で男子の事務系の求人は来ず、大手運送会社の航空便部門のドライバーとして就職することになります。真面目で曲がったことが嫌いな性格のため、もちろん仕事はきちんとこなしましたが、社会に出てからの様々な理不尽の数々に辟易し、人づきあいもろくにせず、気付けば「自分さえよければ」という考えを持つようになってしまっていました。

少し話は飛びまして、2011年の東日本大震災まで進みます。15年前、あの震災が発生した際、私は東京の首都高速道路の高架の上を仕事のワゴン車で走っていました。運転中に揺れを感じ、徐々にスピードを落とし、まわりの車も完全に停止した頃には激しい揺れとなり、瞬時に阪神淡路大震災の時の、バスが転落寸前でかろうじてとどまっている姿が頭の中に浮かびました。恐怖で何度も「うわ〜」と叫びながら、頭を押しつけたハンドルをしっかりと両手で握りしめ、長い揺れが収まるのを待ったのを鮮明に覚えています。新聞やニュースでは連日、まるで映画のシーンのような写真や映像が報じられており、何か月経ってもその様子に変わりがないと感じた私は、「一度、被災地がどんな状況なのか」を自分の目で確かめたいと思い、7月に初めてボランティアで宮城の石巻を訪れました。

そこには、4か月も経ったとは思えない惨状が広がっていました。当日、現地で私たちボランティアは、がれきの撤去や側溝の泥出しをしました。その日、地元の女子高生二人と一緒に作業をしてくれたのですが、活動中に震度4の余震があり、そのうちの一人が震災の日を思い出し、ずっと泣き続けてしまいました。その姿を見た私は、「ああ、たった一度来ただけではダメだ。この子の涙が止まるまで、被災地に通り続けなければ」と思い、翌週から、被災地に通うようになったのです。



(石巻・大川小学校での祈り)

その後、福島県のいわき、南相馬、宮城の南三陸に集中して通うと、ご自身が大変な経験をされたにも関わらず、「これ飲んで」「これも食べて」と、私たちボランティアを優しく気遣ってくださる方が多く、東北の方の心の温かさをひしひしと感じました。月に2～3回の頻度で通うようになると、日曜の午後に現地を出発して東京に近付くにつれ、だんだんと気分が重くなっていきます。理由は、東北の地から離れて東京に帰るのを嫌に感じたからで、そういう気

分になると決まって、次の週末にまた東北に戻れること『だけ』を楽しみに、平日の東京での生活を乗り切ったのです。いつもの被災地のみなさんとお会いできることももちろんですが、毎回のように一緒に現地向かう素敵なボランティア仲間と同じ時間を過ごせたことも、長く活動が続けられた要因なのだと思います。

都会では決して味わうことのできない、人の優しさや温かさを感じる貴重な経験を被災地でしたことで、私の中で何かが目覚め、人生の転機を迎えることになったのです。



(仮設住宅から新居への引っ越し手伝い)



(被災地・南相馬でのマラソン大会にて)

2 初めての地方移住

2015年の年明け頃、地方移住を検討し始めました。いろいろ調べていく中で、「そうだ京都、行こう。」のCMに倣って、「そうだ地方、行こ

う。」と思い立ち、いろいろ調べていく中で目に留まったのが、地域おこし協力隊を募集していた、長野県の栄村という豪雪地でした。「どうせ行くなら中途半端な田舎じゃなくて、これでもかというぐらいの所がいい」と考えていた私の思惑と一致したその場所は、となりが新潟県の津南町で、秘境の豪雪地と言われる『秋山郷』と呼ばれる場所なのでした。

役場などのある栄村の本体とは飛び地になっていて、除雪の関係で冬場は必ずとなりの新潟県・津南町を通らなければ行くことのできない『秋山郷』は、警察の駐在所すらなく、なかなかの衝撃を与えてくれる場所でした。

書類選考から役場での面接・現地見学を経て、その年の4月に着任となりました。栄村での協力隊募集は初めてとのことで、私の他に着任した二人も含め、皆がフリーミッションでした。活動を考え、実践していくのはなかなか困難な状況で困り果てていた頃（細かな活動については割愛）、段階的に路線バスの運行区間が縮小していききました。最終的にはとなり町のだいぶ手前までしか運行しなくなり、その場所から村の最奥までの区間を、津南町と栄村でデマンドバスとして運行することになり、私はその運転手として働くことになりました。



（栄村・秋山郷でのデマンド交通にて）

その運行時、高齢の方が病院への通院ついで

に近くのスーパーで買い物をされ、片手に杖、もう片手には買い物した袋、さらに雨の日には傘も、といった姿を目にしていました。幸い、お宅の前まで送迎ができる形での運行だったため、運転手の私が玄関までお荷物をお持ちするということできていましたが、あれが私の理想とする仕事の形だったのかもしれませんが。デマンド交通は予約制での運行でしたが、おじいちゃん・おばあちゃんが電話で予約するのも大変かと思い、病院帰りのご自宅到着時に「次はいつ病院？」とお聞きし、私が代理で事務所内の予約台帳に記入しておくと共に、「〇月〇日、行き・1便、帰り・2便、予約お受けしました」と書いたメモもお渡ししていました。

着任した当時、小学校の全校児童は2名でした。そのうちの一人が6年生で最後の運動会となるため、少しでも盛り上がってほしいと思い、ボランティア仲間10数名を呼び一緒に参加してもらい、その6年生の児童に、「いつもよりにぎやかでうれしかった」と言ってもらえました。

いいことばかり書いていますが、見えない苦労も多くありました。それでも、「都会から来た親切的な男」は充実した生活を送っていました。しかし、そんな中、私は実家の事情で東京に戻ることにになり、栄村を離れることになります。

3 二度目の協力隊として、上小阿仁へ

東京に戻り、そうすると途端に都会の色に染まり、あっという間に都会人と化して過ごしてしまう私がいました。それから数年の月日が経ち、東京でコロナの時期を過ごしました。2023年には謎の肺炎で入院し、あと少し我慢していたら命の危険があったということもありました。また、日常的にも身体の衰えを感じる

ことが増えていくうちに、いつ死んでしまうかわからないし、私が私らしくいられる（やりたいことを仕事にできて幸せを感じられる）のは、都会ではなく地方での暮らしなのだろうと漠然と思うようになりました。そして、縁あったどり着いたのが、ここ上小阿仁村でした。ここだけの話ですが、正直に言いますと「もう雪国はいいかな」と思っていました。ですが、そこはもう運命なのでしょう。またしても雪国に呼ばれてしまったのです。そして「また雪国」なのが自分らしくもあるのだな、とも感じます。

肺炎で入院した病院のベッドで天井を眺め、「自分が高齢になった時、運転もできなくなったら買い物に行けないよな」と、いつになく真顔でそう思ったことが、上小阿仁村での移動販売を志したきっかけでもあります。長野の山奥でもそうでしたが、少し違った目線で物事を考えると、何十年後かの自分だったら、「こういう事に困っているだろうな」や、「こんなサービスがあったら助かるだろうな」につながってきます。それを自分の立場に置き換えた時、移動販売を必要とされている方のお気持ちが想像できるからこそ、私は「これがやれるなら行きたい」と思ったのです。そして、2025年5月、上小阿仁村の移動販売事業を担う協力隊として着任しました。



（村のゆるキャラが目印、移動販売車「こあにカー」）

4 買い物の主役はお客様

村では現在、食料品の買い物をできる場所が、道の駅とコンビニのローソンしかありません。車が運転できる、またはその2軒に歩いて買い物に行けるならいいのです。しかし、そうでない方は、1日数本のバスでそのどちらかに行くか、となりの市のスーパーに買い物に行くしかありません。

移動販売車は月曜日から金曜日まで、村内約20集落を一度ずつまわります。軽の保冷車で、食品、日用品、冷凍の魚・肉、お惣菜などを積んでいきます。積める量に限りがあるため、ティッシュやトイレットペーパーなどのかさばるもの、まとまった量のものは注文として受け付けています。また、通常取り扱っていないものも注文としてお受けして、日にちに余裕をいただいたうえで対応しています。

車を停める場所は、個人宅の前、空き地、集落の施設前、美容室前など。お客様も、一人だけの場所、数人来られる場所、たくさん集まる場所と様々です。ご自身での買い物手段がない方が大半ですが、お仕事で買い物に行く時間がない方や、冬場、吹雪の中の運転を躊躇される方が買ってくださいたり、「昨日買い物行ったけど、〇〇買い忘れちゃって」という方もおられたり。男性の方もおられますが、8割方は女性で、一人でもそうですが、何人も集まると、そのパワーには圧倒されてしまいます。また、90歳を過ぎた方も元気に買い物に来られます。

週に一度しかお伺いできないため、移動販売車の到着を心待ちにしてくださっている方も多く、毎週お伺いする度に、「こうして来てもらえてありがたい」と何度も頭を下げて御礼を言ってくださいる方もおられます。一人暮らしの方は、

移動販売車での買い物の際にお話しをされるのが楽しみという方も多く、それは、移動販売がお伺いした時にしか会話をする機会がないということの裏返しでもあると思います。実際、協力隊としての移動販売業務の中に、「高齢者の方の見守り」というものが含まれており、移動販売車の到着をお知らせするためにお伺いしても呼び掛けに反応がないなどの場面で、まさに「踏み込んだ」対応をすることもあります。その判断はなかなか難しい面もありますが、後で手遅れになるようなことがあってからでは遅く、その時の躊躇が後悔を生むことのないように、「おせっかいで済めばそれでいい」との思いで行動するようにしています。

村内では、生協の宅配などで食材を調達することもできます。しかし、決して批判するわけではありませんが、やはり品物を手に取って、ご自身の目で選んでこそが買い物の醍醐味であって、目の前にある商品を手に、「今夜は〇〇にしよう」などと考えるのも、きっと楽しいのだと思います。お身体が不自由な方にはサポートしながらお買い物をしていただくこともあります。お客様によっては過度なお声掛けをせず、少し離れた所から見守るというケースもあります。売り上げが良いに越したことはありませんが、村の移動販売の趣旨はあくまでも、「買い物困難者の方のお手伝い」であるため、押し売りはしません。賞味期限が近く半額になっているような場合や、お客様の好みのものがあるような時には多少オススメもしますが、お客様のそれぞれのペースでじっくりとお買い物していただくことが理想だと思っています。なにせ、この村の移動販売の買い物の主役は、お客様ご自身なのですから。

通常の販売ではいつも同じものばかりを積んでいきがちですが、どこにでも買い物に行ける私自身でさえ、同じものばかりでは飽きてしまいます。そういう意味では、お客様には選択の余地が少ないこともあり、いつもと違ったものもご用意してお伺いするようにもしています。「こんなものを積んでいったら買ってくださいかな？」と積んでいったものがすぐさまお買い上げいただけたような時は、心の中でガッツポーズをして喜んでいます。

傍から見ると大変そうには見えない移動販売ですが、大雨や吹雪の日、暑い夏、強風の日などの悪条件ではなかなか厳しいものがあります。どしゃぶりの中、何名か集まる場所での販売の際、傘もカップも役立たないような状況でどうしようもなくビショビショになり、みんなで大笑いしたこともありました。そんな上小阿仁村の移動販売です。



(移動販売車での買い物)

5 移動販売の未来と、村への願い

私が村に来て、1年2か月が過ぎました。お客様の中でも亡くなられた方が多数おり、お客様の数はどんどん減っています。それでも、買い物手段のないこの村の高齢者の方にとって、移動販売が生命線であることは間違いありませ

ん。それは日々、「食べることは生きること」の、生きるための食べ物をお届けしているという実感がある私だからこそ、感じられていることでもあります。

「移動販売なんて、必要あるの?」、そんな声も聞こえます。そんな方には、「一人暮らしで、まわりに身寄りも、気軽に頼れる人もいなくて、足腰も不自由で、もちろん車の運転もできない」、そんな状況になった時のご自分を想像してみてください。私は声を大にして言います。移動販売は必要なのです。少なくとも、この村にとっては。

協力隊には「任期後の定住」が前提という方針があります。もちろんそれを目標としてこの村にも来ました。ただ、定住という前提以前に、

「今、この村に必要である」募集であり、「他に誰もいないなら私が行ってやりたい」という思いが先に立った部分もありました。村としては、協力隊の採用を継続して移動販売を続けることができればいいのかもしれませんが、私のような「気持ちだけで生きている」ような人間は、パソコン一つでお金になるような何かができるわけでもありません。定住するために村に残ろうにも、村に仕事はなく、起業したとしても生計を立てて暮らしていける可能性は極めて低いです。私がこの村に残るため、現在は道の駅(かみこあに観光物産株式会社)に委託している移動販売事業を、任期後には個人である私自身に委託してもらえるような形にできないかと考えています。その仕組みについては熟考する必要がありますが、私のように「気持ちがあつて村に来た」人間が定住できるような環境をつくるため、村にも協力していただきたいと思います。

6 ありのままの私でい続けること

「頑張ってるね」、そうお声掛けをいただくことが多々あります。しかし、私としては「そうでもないんだよな～」といったところが実感なのです。背伸びせずに、自分のやりたいこと、やれることをそのままやっているだけで、お客様への想いとして伝わっている。言葉じゃなく、行動で伝えられること。それは薄っぺらい言葉以上に、伝わるのではないかと思います。だから私は、震災ボランティアの際に得た、「人様のために何かをして喜んでいただけることに幸せを感じる」という気持ちを、これからもこの村で、大切なお客様のためにお伝えしていきます。

着任時、作成した名刺の文言に、「遠くの親戚より近くのきしこ(きしこ=きし こういちの略)」というものを入れました。お子さんやお孫さんがいらっしゃっても、一緒に住んでいなければ、いざという時すぐに手助けすることはできません。それならば、大半の方の息子ともいえるぐらいの年代である私が、困った時にいつでも駆け付けられるように、との思いも込めてそう記しました。

5月の母の日前の週には、この村での私のたくさんの『お母さん』たちであるお客様に向けて、日頃の感謝の気持ちをお伝えするため、カーネーションをプレゼントしました。お渡ししたのはたった1本のお花ではありますが、皆さんとても喜んでくださいました。それは、普段の何気ない移動販売の風景に、たくさんの笑顔の花が咲いた瞬間でもありました。笑うことはとても良いことですし、人を笑わせるのは私の役目でもあると思います。なので、今後も村の演芸イベントや近隣のマラソン大会、ハロウィン

の週の販売などでも、得意の(?) 仮装ネタでお客様や村民の皆様に笑っていただきたいと思います。

お買い物の代金をいただくのと同時に、たくさんさんの「ありがとう」と笑顔をいただいています。それは、お客様に私の気持ちが伝わっていることの表れだと思いますし、それを感じられていることこそが、私がここに来た意味そのものでもあると思います。まだ100%ではありませんが、「私の人生の集大成」が最大限実行できるよう、残りの2年弱、業務に邁進していきたいと思います。私ができるのはほんの小さな幸せを感じていただくことでしかありませんが、その小さな幸せのおすそわけが、村中の皆様に届きますように。



(母の日企画 お客様にカーネーションのプレゼント)
写真提供：秋田魁新報社

<担当者から一言>

上小阿仁村では小売店の廃業と公共交通の減便により、日常の買い物が困難な状況になりました。買い物弱者への対応として、令和3年度に移動販売を担う協力隊を募集し、買い物支援の協力隊としては2人目の岸隊員が地域の方々の日常生活を支えています。

岸隊員は長年、ボランティア活動で、人とのつながりを大切に活動을続けてこられました。その経験がこの買い物支援でも生かされ、移動販売に限らず、地域住民への声掛け見守りなど、住民に寄り添った活動をしていただいております。

移動販売を通じ、地域を見守る岸隊員に感謝し、安心して暮らせる地域づくりをめざしていきたいと思っています。

(上小阿仁村総務課企画班 高橋 舞子)